

---

# 宝石仕掛けの青ダイヤ

蒼羽 レイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宝石仕掛けの青ダイヤ

### 【Nコード】

N5849A

### 【作者名】

蒼羽 レイ

### 【あらすじ】

ダイヤばかりを狙うキッドから予告状が。一方、蘭の友人から受けた依頼で、とある洋館に行くことになったコナンたち。しかしこの洋館には、とんでもない仕掛けが……その仕掛けにひっかかり蘭と灰原は大ピンチ。様々な人物がそれぞれの思惑を抱え動き出すその結末の先にあるものは……。処女作のリメイク版…キッドとコナンの世界をシンクロさせたコラボストーリーをどうぞ。

## 1話 足音(前書き)

この宝石仕掛けの青ダイヤは、CNRのリメイク版にて提供いたしております。

## 1話 足音

ある部屋の一室では、カタカタとパソコンを叩く音がする。部屋の中はというと、あらゆる機械に囲まれ、人が3人も入れればもういっぱいといった空間であった。

画面に表示されているのは、とあるサイトのチャット画面。

徳土 大輝>なら、みんなで今度行きましょうー？

アップル>でも危険だし、何か起こったら大変だし。

トレジャーハンター>大丈夫だろオ

次々と変わっていくチャット。

彼は、不敵な笑みを浮かべながら、パソコンを叩きはじめる。

トリックスター>なら、頼れる人に来てもらうのはどう？探偵とか周りにいないの？

トレジャーハンター>別にいらねエだろー

アップル>あ、でも私知り合いにいるよ！そういえば。じゃあ頼んでみていい？

徳土 大輝>誰？

アップル>結構有名な人だよー！。毛利小五郎って知ってるー？

徳土 大輝>知り合いなの？……マジですかあー？

トレジャーハンター>眠りの小五郎？

アップル>そうそう！

トリックスター>じゃあアップル聞いてみて。

アップル>了解！そしたらまたみんなに知らせるね！

話がひと段落ついたところで、各人は用事があるからといって落ちていく。

彼は座っているイスで軽く床を蹴って、イスごと後ろへと移動させる。

彼の背後には、ずらりと並べられたファイルが陳列していた。その棚を人差し指でおいながら、目当てのものを探し出す。

調査書という場所の「あ」「ん」の段。

「た」の段から・伊達寛史

「つ」の段から・辻亜矢

「こ」の段から・今野亜祐……

次々と取り出していき、机に並べる。

「へえ」

なかなかおもしろいメンツがそろってそうだ。

そして注目すべきは……

「今野亜祐、今野総一郎のひ孫。現在父、母、妹とともに生活中。

帝丹高校出身、空手部。毛利小五郎とのつながりは、娘、毛利蘭と

先輩・後輩の友人関係」

彼が次に目を通したのは、「毛利蘭」

「毛利蘭、毛利小五郎の娘。帝丹高校出身。現在、父と母は別居中

で父とその居候のコナンとともに生活中。工藤新一と幼なじみ」

毛利……蘭ね。

おもしろそうに、彼はページをペラペラとめくっていく。

「毛利小五郎。元刑事の探偵。現在、眠りの小五郎と評され名探偵として活躍」

彼はここと言わんばかりにトントンと人差し指で、「現在、眠りの小五郎と評され名探偵として活躍」という部分に笑みを浮かべた。その時ふいに、携帯の着信音が鳴った。

十数個はあるだろうその数の中から、赤い携帯が光りだす。

「はい、もしもし？」

「わ、私だ。江守だ」

「ああ！お待ちしておりました。取引の件のお返事は？」

「渡す！渡すから、金と家族の命の保障は必ずしてくれる条件でだ

！」

ひそひそ、震えるせつぱつまった声が相手の必死さを訴えている。立場より家族を選らんだ、か…。

青年はくすつと笑い、

「ええ、もちろん。あなたの家族の命は保障します」

彼は携帯を持ったまま、窓際へと歩いていくと少しカーテンを開ける。

外はもうすぐ夕暮れといった頃である。

「では、江守さん。数日後、取引場所を指定しますので、いつでも連絡のとれる状態にしておいてください。連絡がとれなくなった場合、あなたはもちろん家族も含め世間から消えていただきますので、よろしくと軽快な声でいう彼に、相手がおびえているのは電話越しからでも伝わってくる。しかしつたない口調だが、彼は同意を示し、いつでも連絡をとれるようにしておくと言う。そこで彼は携帯を切った。

彼は赤い携帯をベッドの上に投げ捨てながら、クローゼットにいき、中を開けて何着もある衣装の一つを手に取る。

黒のスーツ、それと黒のネクタイ。

時計を見て、机に散らばった中の3つのファイルを見て一笑する。

ぬるくなったコーヒーを一口だけ飲み、スーツに袖を通し彼は鏡の前へと立った。

ネクタイを慣れた手つきでむすんでいく。

工藤新一。高校生探偵。サッカーの腕は高校級。毛利蘭とは幼なじみ。推理小説家である工藤優作と元女優の工藤有希子とのひとり息子。現在両親は外国に滞在。当人の行方は1年ほど前から行方不明だが…組織の名簿登録によれば死亡

そして……

江戸川コナン。1年ほど前から毛利探偵事務所に住む…

工藤新一が行方不明になり、江戸川コナンが毛利探偵事務所に住み

始め、毛利探偵が名探偵として世間に注目を浴びるようになったのが1年前。

いづれも同時期で一致する。

（ひとつの仮説がたっちゃんよねえ）

くすりと笑う。

そして、がちゃっと弾を確認し、拳銃を懐へしまった。

「さーて、行きますかね」

弔いの服に身をつつみ彼は部屋をでると、自分も夕暮れの中の雑踏にまぎれていった…

開け放したドアから風が吹き抜ける。

机に広げられたファイルが、バラバラと音を立ててめくれていく。

めくれていったページは、先ほどこの家の主が調べていた人物のところだとまる。

江戸川コナン。1年ほど前から毛利探偵事務所に住む…

しかし「江戸川コナン」という人物の戸籍は存在しない

## 1話 足音（後書き）

こんにちは。蒼羽レイです。

いやー復活です！いやアこれあたしの処女作なんですよー笑。

さて、すでに読んだ方もいると思いますが、少しいじりながらまた新たに話を作っついていこうかと笑！内容の本質は変わりません。だから、すでに読んだという方にも少しはまた楽しんでいただけるのではないかなって思います。

前の青ダイヤの感想の返信をかけなくて申し訳ありませんでした！本当にごめんなさい！！  
だけど全て読みました。この場をお借りしてお礼を。

花月 雪さん、NEWS10さん、ちかさん、好奇心さん、ためごろうさん、匿名さん、それからそれ以前に書いてくださった方、ありがとうございます。

近いうちに、そちらの方は削除させていただきますのでご了承ください。でも書いてくれた感想はちゃんと保存するけどね笑。ちゃんと終えることができたのも、またリメイクができるのも、100%励ましてくれたみんなのおかげっすから。

また新たに感想を入れてくれるとめっちゃ嬉しいです。今度はちゃんと返せるよ！ごめん。

それと指摘のあったところは出来る限り修正をしながら、よりよい作品に仕上げていきたいと思っております。

これからほそほそと更新していきたいと思っておりますのでよろしくおねがいします！

蒼羽 レイでした。。



## 1・5話 前記

夜の帳が降りる。月光のスポットライトを浴び、美術館の屋上にた  
たずむひとりの男。

警察の制服に身を包み、ひとり待ちくたびれたといった様子で、  
すりの上に絶妙なバランス感覚で座りながら、彼は待っていた。  
そして…

「ようこそ。宝石仕掛けの青ダイヤへ」

はりつめた空気を楽しむように、青年は口元に笑みをつくる。

「はじめまして、お会いできてとても光栄ですよ。まあ、すでに「  
存知という方も中にはいらっしやるはずですけど」

クスリと笑い、彼はどこからか一枚のカードを取り出す。

「そういえば今晚、ここにキザな怪盗が来るそうぞ」

そして彼はそのカードを読み上げた。

「今晚20時、江古田美術館に展示されし、ダイヤモンドを頂きに  
参上する…」

時刻は19時55分である。

にぎわう東京の町並みが、光の粒子の夜景となって目の前に広がる。  
そんな中、ブブと上空を旋回しているヘリの轟音が聞こえてきた。

「警部！怪しい警官を屋上にて発見！！」

怪しい警官と言われたその青年は、にやっと笑うと、てすりから勢  
いよく降り立つ。

月光よりはるかに強くてまぶしいスポットライトを浴びせられるが、  
それをものともせず平然と辺りの様子をうかがっていた。

「では、ギャラリーも出てきたことですし、かくれんぼはここまで」  
彼が言い切ると同時に、バンツと屋上のドアが開け放たれる。

「け、警部…ハアハア、か、怪盗キッドを視認しました！」

かけられた言葉にこたえるようにして、彼は制服を脱ぎ捨てる。

そして先ほどまでの警官とはまるで違う、純白の衣装が彼の身を包んだ。モノクルとシルクハットが仮面となり彼の表情を覆い隠す。

「大正解。まだ予告前なのに、こんなにあくさんの方に出迎えていただけるなんて…警察の方々の努力には嬉しくて涙がでそうですよ

…」

そう言つて、ゆっくりとわざと人目につくよう目の前に出されたスイツチに、周囲の警察はしまったと息をのむ。

予告時間まであと2分。

「さて…リメイク版みたいですから、派手にやるとしますかッ」  
ポちつと押されたと同時に、そこに閃光が放たれる。

「この陰謀渦巻く捕り物劇…とくとお楽しみあれ」

館内の照明が全て消えたかと思うと、警報器が鳴り響いた。

## 1・5話 前記（後書き）

こんにちはー！。

実はこの話、2話目の前書きに書く予定でした！

ですがそこは、さすがあたし！

書ききれなかったんですねー、字数オーバーで笑

この話を読んだ後、すぐに2話目にいくといいですよー。

では、2話目お楽しみに

## 2話 怪盗

ジリリリリ

水を打ったような静けさの中で、何人かの足音が壁を伝って反響する。

場違いな警戒音が、美術館内に大音響で響き渡った。

「警部、キッドが屋上から姿を消しました!!」

「なにイ!？」

無線を切り、時刻を確認すれば予告の時間である。

「まずい…ヤツは一体どこへ？」

「いましたっ、あそこですっ!!」

獲物を狙う彼の姿が影となり、闇に慣れた目がその姿を確認する。

「いいかーっ!絶対ヤツを逃がすな!!」

物陰に身を潜めていた警官があちこちから現れて、侵入者を捕らえようと態勢を整え部屋を取り囲んだ。

誰もが緊張の面持ちで周囲を警戒する。

警察に囲まれた状況の中で、彼は一笑する。

夜で完全にクローズとなった会場には自家発電に切り替わって新たに照明がつけられた。

その場所でスポットライトを眩しいくらいに浴び、窓際に立っている青年は、シルクハットに隠されて顔ははっきりしない。

窓越しに映る、白銀色に光り輝く幻月を背にし、彼は悠然と笑みを浮かべた。

独特の澄んだ気を発し、その冷涼な存在感で周りの雰囲気圧倒させる気性。

人を惑わす巧みな手口で、まるで魔法のように獲物を盗む天才的犯罪者。

彼を言い表す名文句は不特定多数存在する。

ある時は、月下の奇術師。またある時は、平成のルパン

しかし闇夜に映え白き衣装で盗み出すその鮮やかな手口をたたえ、世間でも最も定着した呼び名が存在する。

怪盗1412号…そう人呼んで

怪盗キッド!!!!!!

どこか人懐っこささえ感じる愛嬌を彼は時折見せてくる。

現に今も手中のダイヤを手にしながらウインクして、

「では中森警部、予告どおり宝石はいただいでいきますんで」

「お、おのれっ…毎回毎回ダイヤばかり、貴様何を企んでやがる!?」

怒りで震えている警部を見据えながら、問い掛けられた言葉に彼は不敵な笑みを浮かべる。

「知りたいなら教えてあげますよ、警部」

チュツとカードに軽くキスをすると、キッドはトランプ銃を取り出し中森警部に向かって撃つ。

「親愛なる中森警部へ」

「ぬわっ!」

中森警部の一步手前の床に、カードが食い込んだ。

それを手にとり、警部は顔をしかめる。

「なんだア!？」

そう言つてカードに気をとられてる間に、キッドはハングライダーを出した。

「なっ!?!待て!怪盗キッド!」

「警部、覚えておいてください…怪盗は創造的な芸術家…マジシャンと同じでトリックを簡単に明かすようなことはしませんよ。それに」

彼は卵型のボールをポンと上に投げて片手でキャッチすると、そのまま下に思い切り投げつけた。

「それを見つげ出すのもあなたの仕事の一部だということを忘れてなく、中森警部」

ボンツと辺りに煙がたちこめ、部屋はあつというまに煙で真っ白になる。

「しまった!!」

窓を開けて煙がはれた時には、彼の姿はもうそこにはなく、変わりに一枚の紙がひらひらと宙を舞い、床に落ちる。

ダイヤモンドは頂いた

くそつとすぐさま、無線のスイッチを入れる。

「上空を旋回中のパトロール員は、キッドを発見し次第ただちにワシに報告！そして全館パトロール中の警官に不審な者がいないかチェックしろ！変装は奴の十八番だ、もしかしたら警官に紛れて逃げた可能性もある」

警部は、ギョツと警官の頬をひっぱった。

「ひっ、ひはいでひゅ、中森警部」

「顔を思いつきりぎゅーつとつねるんだっ！奴を逃がすな…」

パシンと頬を離れた後、無線のスイッチを入れ、全警官に命令を下す。

「怪盗キッドを捕まえろ!!!」

「にしても、タフですね、彼も。この2週間で、もう5件目ですよ。痛たたた頬をさすりながら、中森警部の側近とも言える警官がぼやく。

「警部そのカードはキッドからの?」

先ほどキッドからもらったカードを指して、警官が尋ねる。

「次の予告状だ。くそつキッドめ、ダイヤばかり盗んで一体なにが目的なんだ?」

「うーん、文面からはなにがなんだかさっぱりわかりませんね。けれど、盗むとすれば、またダイヤですかね?」

警察手帳を開きながら、ふうと1人の警官が溜息をつく。

「はア、こんな時白馬君がいれば、この予告状を解いてくれるかもしれないんですけど」

「バカヤロオ!!!あんなすかした探偵きどりのガキにまかせられっ

か！」

「それじゃあせめて、毛利さんとか……」

「あのギャグ探偵も似たようなもんだろーがバカタレ！」

「そうですねえ……あ、でも警部ー、ここ数日、彼がダイヤモンドばかり盗んでいるせいか、ちょっとした宝石ブームになっているらしいですよ？うちの奥さんもそうで、今度ダイヤモンドでもプレゼントしようかなーなんて……痛ッ！」

そう笑っている彼に、ゴンツと警部は、彼の頭をぶった。

「ばかやるっつー！！そんなのは世間が面白がって、宝石業界の戦略にのせられているだけなんだよ！大体なー、アイツのせいで一体いくらの被害にあっているとってんだ！」

「そんなこと言われましても……」

（八つ当たりだ、絶対……）

なぐった拍子に落ちたカードを警官が拾う。

見ると、1枚のカードにはこう書かれていた。

### 予告状

L X + I = p m の時から

名づけの理を示す者

下の者が愛する女性からプレゼントされた最

後のものを

我は頂きに参上する

怪盗キッド





## 2話 怪盗（後書き）

こんにちはー！。蒼羽レイです。

さて、以前のを読んでいる方はもうお気づきになられたでしょうか？  
暗号が変わってますねー！。

新しく作り変えてみましたあゝので！みなさんも考えてみてください  
いね。

以前より簡単になっているはずですよ…いや、解説が簡単になった  
けかも笑

ヒント？ヒントはね、一番最初の数字とイコールで結ばれたp m。

これは両方ともある何かを示しております。

何かがわかっちゃえば、あとは文章どおりに解読していただくかな笑  
わかるかな笑。わからないよな笑。

ぜひ考えてみてねー！v v  
ではでは。

次回！

### 3話 前兆

「クククツ…これで全戦全勝、次はいよいよ大物かー」  
快斗は机の上で新聞を開くと、一面に飾られている見出しを読み始めた。

怪盗キッド、昨夜もまた華麗に登場！！彼の目的とは一体書かれている言葉を読みながら、得意満面な笑みが自然とこぼれる。（この分だと、今度の仕事も楽勝だなー。白馬の野郎がいねーから仕事がりやすいぜ）

にやにや笑っている快斗に、青子が、バンッと快斗の机を思いつき叩いた。

「いいかげんにいー」

「お…？」

青子は、快斗のYシャツをつかむと、前後に思いつきり揺する。

「あのドロボウ！毎回毎回、ダイヤばかり盗んでねーっ！！おかげでお父さんがどれだけ苦労してると思ってるのよー！！」

キッドはどっからどーみても大悪党！人のものを盗んで楽しんでるなんて最低！

それなのに、世間的な評価といえは、天才マジシャンと名高い天下の大泥棒ときたもんだ。おまけに、キザで良心ぶった彼の人格が人氣をよんでファンも多いという現状。

（まったく、天才だか何だか知らないけどねーっ！アイツが人のものを盗んでる犯罪者に変わりはないのよ！！それなのに、みんなキッドキッドってえ）

ぎゅっと制服を握る手に力が入る。

そんな青子をなだめるような快斗の声が、思わぬ所から聞こえてきた。

「んな泥棒相手にマジで怒んなって。しゃーねーだろ？オメーのオヤジがいくら苦労してるっていったって、キッドは宝石専門の大怪

盗なんだからよ」

「快斗？」

快斗の声が後ろから聞こえてくるのに驚いて、青子が後ろを振り向けばテーブルの上に座りこみんで、新聞を読んでいる快斗の姿があった。

「青子それよりオメーさ、早く放してやんねーと窒息しちまうぜ？ そいつと快斗の視線を追えば、青子が快斗のシャツの襟をつかんでいたと思っていた人物はいつのまにかクラスの男子生徒に入れ替わっていた。

(え…じゃあ、青子が今まで揺すってたのって…)  
さーっと顔から血の気がひく。

「は、早く放ひて…」

「ご、ごめん！えっと青子、気づかなくて…わー大丈夫っ!？」

青子が解放すると、その男子は悪酔いをしたらしくぐたーとなる。

「あーあ。青子」

自分の身代わりとなった男子生徒に、快斗はあわれみの視線をおくりながら、青子の肩に手をおく。

「オメーもうちつと女らしくなれ！キッドなんかよりもまずは女をみがけて」

しかし、今度は快斗の頬にパシツといい音がした。  
パンパンと手をはたいてそっぽ向く。

「フン」

(原石だつて、磨けばきれいな宝石になるじゃねーか…)

ぼやきながら、快斗は痛てーと頬をさすっている。

「いいよーだ。別に。快斗に言われたくないもん。キッドだつてきつとお父さんがそのうち捕まえちゃうんだから」

(ハハ…あの警部じゃ、一生かかっても逮捕は無理)

とは、口がさけてもいえないが。

オレが怪盗キッドなんだぜ…あのへボ警部にオレが捕まるかってーの。

「おっ!？」

快斗が新聞をめくると、文面に「キッドの影響で世間ではちょっとしたダイヤモンド」と書いてあった。

(へー。泥棒みよりにつきるぜ、こりゃ)

「でも最近キッドにかかりつきりで、お父さんろくに帰ってこないの」

なんとなく寂しいような表情をみせる青子を、快斗はちらっと盗み見る。

「……………」

「でもさ、青子のお父さんだつて、この頃テレビでよく出てるじゃない? もうキッド並の有名人よねえ」

「恵子…」

話を聞いていた恵子が仲間に入ってくると、青子の前でウィンクする。

「それに、ここ2週間キッドの狙ってるものって全部ダイヤだし? 彼の目的が何なのか気にならない?」

「気にならない! あんな泥棒の考えなんて分かりたくないんだから!」

その時、教室のドアがガラッと開いた。

「あー、紅子ちゃん! おはよう」

青子が手を振って挨拶すると、彼女はにっこり微笑んだ。

「あらおはよう、中森さん」

入ってくる彼女の首にふと目がとまる。屈折の輝きで辺りに光を放っているその宝石。

鼓動が聞こえてきそうな、生きてるとさえ思わせる存在感にみんなの目は嫌でもそこに集中した。宝石もそうだが、なんていうか紅子が身につければいっそう神秘的に感じる。

「紅子ちゃん、もしかしてそれダイヤモンド? キレイ! 紅子ちゃん美人だからすごく似合う!」

「ありがと。中森さんもつけてみたらどうかしら? あなたなら、サ

ファイヤとか似合いそうよ」

「えーほんと？」

「うそにきまつてんだろ。まず、宝石をつける前にもう少し胸をでかくする努力が必要なんじゃねーか？」

そして青子の胸を触り、開いたり閉じたりして手の感触を調べてひとり納得したようにうなづく。

「うん。青子はAカップッ」

バカッ、ボコッ、バキッ。

ほとんど半殺し状態まで殴った青子は、手を握ったまま顔を真っ赤にしていた。

殴ってもまだ物足りない。

「失礼ねっ!？」

(だから、宝石つけると嫌でも胸が際立つから)

親切に教えてやったつもりがこの仕打ち。

「まつたく……」

青子はその時なにかを思い出したらしく「あ！」と快斗の方に向き直った。

「快斗、あさつての夜、トロピカルランドに連れてってくれるっていう約束ちゃんと覚えてるよね？」

「へいへい。期末の賭けだろ？」

快斗と青子は総合得点が2点差で青子の方が上だったのだ。

いかにも不服そうに言う快斗に、青子は勝ちほころんで、

「ゼーんぶ、快斗のおごりなんだから、お財布忘れないでよねー」

「デメ… 一体いくらおごらせる気だ…?」

(……あれ… 待てよ。あさつて…?)

あさつて…

あ、まずい!

トロピカルランドに連れて行くことしか頭になかった快斗は、日にちを聞いて驚く。

(オイオイ、その日無理じゃねーか)

「あ、青子…俺あさつての夜はちよつと予定が…」

すると、青子も床に座って快斗と至近距離で見詰め合う。

「あつて…ってかなに？」

思わず身がまえるが、青子はせつぱつまった様子だった。

「だめ！青子、ずっと前から言つてたじゃない！？明後日がいいの」

「別の日にすりゃーいいじゃないか。夏休みもあんだし」

手をひらひらさせながら言う快斗に、青子はうつむき加減で聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で言った。

「その日じゃなきゃ…ダメなの」

(やべーなー)

ちらつと青子を見れば、どこか哀しそうで張り詰めていて少しついたら、張り裂けてしまいそうだった。

しゃーねーなと困つた顔で溜息をつく。

「わかつた…」

「え…？」

顔をあげる青子の額に、軽くでこピンをして、

「じゃー明後日の夜な。そのかわり、少し遅れるかもしれないからな」

すると青子は花のようにふわりと微笑んだ。

「うん！待ってる！！約束よ、快斗」

この笑顔に弱い自分に、もはや否定はできなかった。

青子が教室から出て行くと、快斗が座っている席の前のイスへ紅子が座る。

「……青ダイヤ」

「あん？」

眩くように言われた紅子の声に、快斗は眉をひそめる。

「あなたが今度狙う宝石、手を引いたほうがいいわよ」

耳元でささやかれた言葉に、快斗作り笑いを浮かべて、

「何のことだかわかんねーんだけど？」

でた、といわんばかりの表情で快斗は紅子を見る。

(八八…この女苦手…)

そんな快斗の表情を無視し、紅子は予言に…と話を切り出す。透き通った真紅の瞳が輝く。それはまるで魔をもつ者への証のように。

「あなたを破滅へと導くジョーカーがいるのよ。あなたが予告状を出したその日にね…」

「ジョーカー？」

「会ったことはあるはずよ。時計台の事件といえばわかる？」

「……………」

そう一年前のあの時と全く同じ雰囲気…。

けれど、何かが微妙に変わっているのは…なぜかしら。

「青ダイヤを盗むのはよしなさい。あなたが狙っているあの宝石は、こつちの方でも有名なのよ」

机に文字を指でつづると、そこから金色の文字が浮かび上がってきた。書かれた文字は浮かびあがり、またすぐに消えていく。

「魔の支配石。私たちはそう呼んでるわ。噂でしかない伝説級の代物。持ち主を選び、その石に見合わなかった者は、皆不幸な死をとげる呪いの石。逆に見合えば願いを叶えてくれるらしいけど」

「んな石のことなんて知らねーよ…大体、今時呪いなんてあるわけねーだろオ」

「……………」

紅子はふと口を開く。発せられる言葉が謳うように紡がれる。

「事の定めに導かれし者集う時…青き石をめぐりて、汝らの身に災い降りかからん。仮りそのめの光の者、隠されし事の真を見抜き、白き盗人は青き石を手に入れる。彼の2人、その時のうち黒に染め自らを破滅へと導かん…」

頬杖をつきながら、快斗は苦笑いを浮かべる。

「へー？まーたくだらねえルシュファーって奴の予言か？」

「あら…私の予言、はずれたことはなくてよ？」

窓から入ってきた風が、紅を帯びた髪を揺らしてなびかせる。

紅い瞳が輝きを増し、どこか魔を思わせ、言葉の意味の真実味をもたせている。

「忠告は一応したわ。あと信じるか信じないかはあなたの勝手だけどね」

予言を信じてとは言わない。行くことをやめるとも言わない。

予言が出来て魔術を使っても、先のことを変える力はない…。

だから魔力の効かないあなたは、私にとつても魅力的な人材だから、捕まらないでいてほしいだけ。ただそれだけのこと。

すると、ピンっと消しゴムが頭からふつてきた。

「俺がもし怪盗キッドだったらの話だけどな」

快斗は、床に転がっていたボールを拾い上げる。

「行くよ。絶対」

そして、そのボールをハンカチでくるみ始めた。

「その占いが本当だとしても、行くのは止めない」

「どうして？」

「それはな」

快斗は黙ったまま、くるんだハンカチを紅子の目の前にさしだす。

「さて、種もしかけもありません。スリー…ツ……ワンツ！」

ハンカチをどかすと、バサバサっと1羽の白い鳩が飛び立つ。

「この目で見えるまで、なにがあるかなんて誰にも分からない、だろ？」

鳩は1周ぐるりと回ると、主人である快斗の手の中へ舞い降りる。

「行動するのは、オレの意思で。占いなんかは、決められたかねえつつーの」

鳩を指で軽くくすぐってやりながら、快斗は言った。

紅子はクスツと笑う。

「黒羽くんらしいわね。あなたたちって運命的よ。2人とも同じ性質なのに、正反対の位置にたっている」

「運命なんてあとづけで決めるもんだぜ？でも、まア…」



鳩がバサツと飛び立つ。

「キッドにとつてソイツは、運命の恋人みたいなもんかもね」

「願わくは、あなたの運命がホープダイヤのように悲劇でないことを…幸運を祈ってるわ、黒羽君」

「だから、俺はキッドじゃねえって…」

紅子はその言葉に笑むと、教室から出て行く。

予言が印された紙を、紅子はポツと炎を出しそのまま燃やす。

強く冷涼に澄んだ気は黒羽君と同じ…

黒羽君と同等の力の対極に位置する者。

その研ぎ澄まされた鋭利で、人が隠した秘密を見透かす智慧ちえの持ち主。

でも、何かが違う。1年前とは明らかに

「仮そめの光の者…何者なのかしら？」



#### 4話 予感

「ハックシヨント！」

「大丈夫か？夏風邪かのオ」

麦茶を持ってきて手渡すと、心配そうに博士が尋ねる。

「いやー？…どこも調子悪くねーし」

「夏風邪はバカしかひかねーんだぞ？」

元太が麦茶をごくごく飲みながら、おかわりを注文する。

「だったらコナンくんがなるのはおかしいよー。コナンくんバカじゃないもん」

「そうですね…もしそうなら元太君が一番初めにひかないとおかしいですよ」

「おい、それは俺がバカつて言ってるのか？」

麦茶のおかわりを持ってきて、テーブルにおくとケンカ態勢に入っている2人を博士がなだめる。

「これこれ、ケンカするでない。そもそも夏風邪というものはお腹の冷えなどからくるものを言っただんじやよ」

「お腹の冷えから？」

灰原が、雑誌に視線を落とすまま、説明をする。

「昔はエアコンがなかったでしょ？だから暑いからといって寝る前に布団をかけなかったり、冷たいモノを飲みすぎたりした結果、こじらす風邪のことを夏風邪といったのよ。そういう考えなしな人が風邪をこじらせてしまうから、夏風邪はバカがひくっていわれてるみたいね。まあでも、考えなしに行動するって所はまんざらはずれでもないんじゃない？」

灰原がコナンをちらっと見るのに、コナンは乾いた笑みを浮かべる。

「どうじゃ？ここで問題でも…」

「「「え…！？」」」

それはもしかして…

みんなの賛成も聞かず、博士は得意そうな顔で話はじめた。

「もうすぐ夏じゃが、あと二人足せば2つの季節が楽しめる。さて残り1つ仲間はずれの季節はどれかのオ」

(ハハー、くだらなすぎるぜ博士)

しかし、子どもたち3人はというと首をかしげ頭をひねっていた。

「仲間はずれってことは冬じゃねえか？寒いしよオ」

「秋だつて寒いよお！」

「となると、仲間はずれなのは秋じゃありませんか？ほら、春休み夏休み冬休みはありますけど秋休みっていうのはないし」  
すると博士が微妙な顔をする。

「あ！もしかして光彦君の当たりなの！？」

「答えはあつてるけど、考え方が間違つてるのよ。ね、博士？」

灰原がクスリと笑いながら、博士に同意を求める。

「あ、ああ」

どうやら灰原もわかつているようだ。

「オメーら【夏】って文字があるだろ？それに博士の言つてた【二人】を足してみるよ」

光彦は頭で考え、歩美は空中に文字を書き、元太は紙にそれぞれ書き始めた。

そして。

「『あ！』」

「そ。【夏】の百の上に【二】を足しさらに【人】を加えれば【春】という漢字になり、【夏】の下の部分、【夕】にこれまた【二】を加えれば【冬】になる。つまり、仲間はずれは秋ってこと」

「その通りじゃ」

笑っている博士に、周りは

「いつもながら」

「…ちよつとね」

「くだんねえ」

解けなかった自分たちは置いて、こそつとグチをこぼしあった。

(ハハ…説明してる自分が情けなくなってくるぜ)

「ハックション！」

そしてコナンはもう1度くしゃみをする。

「誰かがあなたの噂でもしてるんじゃない？」

「誰がだ…よッ、クシユン」

その時、鼻をさするコナンの耳にふとテレビの音声が届いてきて、テレビ画面に目線がうつる。

「怪盗キッドが昨夜もまた現れました。盗まれたのは江古田美術館にあるダイヤモンドでこれは」

とキャスターが興奮気味に話している。

「キッドってすごいねー。何でも盗んじゃうんだもん」

「また会ってみてーよなあ」

「会ってみたいですけど、彼はなんて言っても神出鬼没ですから…よほど運がなければ会えませぬね」

「でも、コナンくんは何回か会ったことあるんだよね。ね、コナンくん」

「え？あ、まあな」

ニュースを聞くのに夢中になってるせいか、コナンの返事はどこか生返事に近い。

「はて？確かキッドはこないだも盗んでなかったか？」

テレビで流れているニュースを見ながら、博士が首をかしげる。

「今週で2件目よ。しかも盗まれているのはダイヤモンドばかりみたいね…先週をあわせれば全部で5件のダイヤモンドが盗まれたらしいし。何を考えているのかしらね？あのキザなコソドロさんは」

コナンは麦茶を飲みながら、テレビの前で頬杖をつく。

「今まで宝石に統一性はなかったから、今回ダイヤばかり狙ってんのはなにか別に目的でもあんじゃねーか？」

灰原はテレビの方に目を向けながら、くすつと笑う。

「あら、よく分かっているのね彼のことを。さすが宿敵って言ったところかしら？」

「別にそんなんじゃないよ。今まで盗んだダイヤにしては希少価値は高いけどビッグジュエルというにはまだ歴史も浅い。それを知りながら盗んでるアイツの行動を見れば、一目瞭然さ。たぶん、そのダイヤはキットが狙う本当のビッグジュエルと何か関係があるんだろーぜ」

(その宝石がアイツの言う目当ての宝石かはわからねーけどな…)  
「なお、怪盗キットの予告状によりますと次でダイヤモンドは最後ということになりそうです。予告状の全文は以下の通りです」  
「え…?」

### 予告状

f i n a l j e w

e l

L X + I = p m の時から

名づけの理を示す者

下の者が愛する女性からプレゼントされた最

後のものを

我は頂きに参上する

怪盗キット

写された文字を夢中でコナンは手帳に書き写していく。

「コナンくん何やってるのー？」

顔をのぞいても、その暗号に釘付けでコナンは反応を示さない。

「ライバルの挑戦状に探偵の血が騒いでるみたいね」

LX+I?

これって確か…でもなんでわざわざこんな書き方を……？

それに「pm」って…どっかで見たことあんだよね、この2つ。  
どこだっけ？

#### 4話 予感（後書き）

こんにちはー蒼羽 レイです。

moonlitの方の執筆の続きを書こうとしたのですがいやはや時間がなくてですねー

青ダイヤのリメイクをすることにしましたあ。

さて、変な暗号がありますねー！。

一回あたしもダジャレクイズしてみてもーと思ってやっただんですが、失敗。

つまらなくすることには成功したんですが、ダジャレにすることはできませんでした。

しかも時間がなくて5分で考えた即席で、なんのひねりもありません笑！

問題解けた方いらっしやいますかー笑？

さて、リメイクした新たな予告状の暗号。

みなさんもぜひ一緒に解いてみてください！

コナン君が、暗号を解いてくれるまでどうやらもう少しかかるみたいなので。

解けた方は連絡を笑

ではでは。また次回！たっ たっ た。



## 5話 出発

街が人で活気づく夕方時。

部活を途中で抜け出す形になったにせよ、思ったよりも早くに帰ってこれて、蘭はほっとした。

なにしろ今日は約束がある。

「ただいまー」

事務所の方のドアを開けようと、ドアのぶに手をかけて思わずためらう。

お父さんしかいないはずだと思っていた部屋の中から、にぎやかな声が漏れていてドアの外からでも聞こえてきた。

「だから、俺たちも捜査に協力するからよー」

「僕たちだって少年探偵団なんですよ！」

「私たちにも探偵の仕事を手伝わせて」

さつきからずつとこの調子で子どもたちの言葉せめにあっている小五郎は、怒りが頂点に達したらしく、額に怒りマークがふつふつとわきだしていた。

新聞を握りしめながら「あ・の・なあ〜」ともう何十回言われた言葉に対し、大声で怒鳴る。

「バツキャロー！こっちは仕事でやってんだぞ！！お前らがやってる探偵ごつことじゃ、天と地ほどの差があんだよ。ガキならガキらしく外で遊んでろ！」

（ま、当然の反応だな）

さつきからかれこれ30分この調子。

缶ジュースを一口飲みながら、コナンは黙って元太たちのやりとりを聞いている。

無理だと言ったにも関わらず、子どもたちは耳をかさずに首を振ってきかなかった。

彼らに言わせれば「言ってみなきゃわからない」だそうなので、折

れたコナンが仕方なく連れてきたわけだが…結果は。

(だから言ったんだよ、無理だった)

この調子じゃ、無理の前にどうやら今日は依頼人も来ていないらしい。

「どーしたの？みんなが集まっちゃって」

珍しい来客に驚きながら、蘭は持っていたカバンをソファアの上に置く。

もともとあまり探偵事務所にやって来ない子どもたちの急な来客に、蘭は少し驚いているようだった。

「あれ蘭姉ちゃん、お帰り。早いな」

いつも部活で遅く帰ってくる蘭が珍しく早く帰宅したのに、コナンは少し疑問に思う。

「うん。ちょっとね…」

答えながら、目線は子どもたちの方へ向けられているのを察しコナンは、事情を説明してやる。

「探偵の仕事を手伝わせてほしいんだってさ」

「へー。でもどうして急に？」

「だって、毎日ヒマなんだもん！」

歩美が口をとがらせてぼやく。

「オレたち少年探偵団なのによー、事件なんにも起きねーしよオ」

(事件が起きたとこで何も変わらない気もするが)

何か勘違いしてねーか？とコナンは乾いた笑みを浮かべながら、元太を見る。

「オメーらなア、事件がないなんて世の中平和な証拠じゃねえか」

「そうですか？テレビではいろんな事件やってますよ。こないだだつて、キッドから予告状だつて届きましたし」

「もしかして、依頼人がきてねーんじゃないか？」

(そうそう。ここ2・3日、来てないんだなこれが)

「バー口、今依頼人来られてみる！ヨーコちゃんのドラマが見れねえじゃねーか！」

(八八：仕事しろって)

横目で笑いながらも、コナンはペラペラと手帳をめくる。

この3日間、何かと予定が入ってしまった、暇がなかったコナンは先日の子の暗号を読み始める。

LX+I=pm の時から

名づけの理を示す者

下の者が愛する女性からプレゼントされた最

後のものを

我は頂きに参上する

この前書き写した子達の予告状を眺め、コナンは思案にふけはじめた。

「あら、仕事がなくてもあなたは忙しいみたいね。名探偵さん？」

その隣で手帳を開いて、何やら考えているコナンの様子に灰原は静かに微笑む。

「子達の暗号は解けたの？」

「いや、全然」

でもなにかひっかかるんだよなあ、このLX+I=pmって。

どっかで覚えが。

午後を指す post meridiem の略は pm…でもそれだと LX+I の説明がつかねーよな。

「pm：燃料が不完全燃焼して生じる炭素、粒子状汚染物質 particulate matter の略で pm とかは？」

コナンはその灰原のなんともマニアックな用語に、なんだそれといった目で灰原をみる。

「なによ？」

「いや、別に？」

さて暗号といった感じで、コナンは手帳にいろいろ書き込んでいく。待てよ…略？物質…

(!!)

もしかして、これ…

「蘭姉ちゃん、ちょっとカバンかして！」

「え？」

蘭のカバンの中から、教科書をぐそぐそと探すと、1冊の教科書をコナンは手に取る。

そして見開きの部分をみた。

そしてにやつと笑う。

(…なるほどな)

「だーっ！！いいからお前らもう帰れ！！ここにいっても今日は仕事なんて来てねーんだよ。いてもムダムダ！」

ビールを飲みながら、シツシツと手を振る。

「お父さん！ちよつとビール飲んじゃったの!？」

おぼんにジュースをのせて蘭がやってくると、ビールを飲んでいる小五郎の手から缶を取り上げる。

「おいおい、いいじゃねーか、今日は別にどこも行かねーんだし。

それになんたつて明後日は、我が最愛のヨーコちゅわんがトロピカルランドでライブ…。気分もトロピカルで行かねーとつてな！」

ナハハハと笑っている小五郎以外は、しーんと場が静まりかえる。

(ハハハ…すっかり酔ってるじゃん、このオヤジ)

コナンがただあきれている横で、灰原は一口ジュースを飲む。

冷めた場で歩美と元太と光彦は偶然にも同じ事を思っていた。

(博士以上のギャグ手がここにいたんだ…)

「寒いにもほどがあるよな」

「博士とは違う場の寒さがありますよね」

「きつと年が違うからだよ」

ひそひそと言う3人の声は、小五郎の耳には入っていなかった。

蘭は子どもたちにジュースを渡しながら、小五郎に言った。

「おとといから言つていたじゃない。今日、私の先輩からお父さんに宝探しを手伝ってくれるよう依頼があったって」

「…た、宝探し!？」

コナンはその3人の目の輝きように、こいつらに言っちゃんいけねー

言葉を今言ったよつなと思つ。

その微妙なさつきとは違つる3人の雰囲気気づいたのは、灰原とコナンだけだった。

「それつて明日の午前つて話じゃ…」

「今日の午後よ！」

(……………)

「つたつてもう5時過ぎてんじゃねーか」

「大丈夫、待ち合わせは6時だから。そのために私、部活やらないで帰つてきたんだよ」

「おいおい、今から行くのかよ!?!」

「ここから40分くらいらしいよ?なんでも名のある宝石職人の建てた洋館らしくて、中に宝石があるみたい。ルビーとかサファイヤとか。そつえば先輩、そこにあるダイヤモンドが欲しいつて言つてたかなあ。なんでもホープダイヤつていうらしいよ」

(え…?)

「フンツ!ダイヤぐれー、自分で買えつてんだ」

「そのダイヤ、伝説級の代物らしくて。だから洋館のどこかに隠されてるそのダイヤを、探偵のお父さんに解いて欲しいみたいだし」

名づけの理を示す者

下の者が愛する女性からプレゼントされた最後のものを

【我は頂きに参上する】

コナンはくすつと笑つた。

「縁があるねえ、オメーとは」

こえーくらいに。

「どうしたの?コナンくん」

「うづん…行こうよ、おじさん。伝説級の宝石なんて見つけたらき

つと大手柄だよ！それにもう1つ…探したい宝物があるんだよねボク…」

子どもとは思えないような笑みをコナンはたたえると、言葉を発した。

「同じくらい珍しくて見つけるのが大変なお宝をね…」

そのピンとはったような明らかに子どもでない雰囲気、小五郎は眉をひそめる。

「宝あ？」

何のことだ？と言わんばかりの表情で、コナンを見て、ふと首をかしげる。

時々、おかしいことを言うこのボウズを小五郎は不思議に思う。

(いつもちよろちよろ首突っ込んできやがって…)

「つたく、しょうがねえな。けど最初に言っておくが、お前たちは連れていかねーからな…」

「…え〜!?!?!」

歩美と元太と光彦は声をそろえて、不満な声をあげる。

「なんでですか？」

「俺たちも行ってーよ」

「ダメに決まってるんだろ！ガキ連れて宝探しなんて行けるかってんだ」

小五郎はチャンネルを押して、テレビを見始める。

「じゃあ、私着替えてくるから、コナンくんも出かける準備してね」

「あ、うん」

蘭はカバンを持ってドアを開けると、3階に上っていった。

「ちえっ、つまんねーな」

「もう遅くなりましたし、今日は帰りましょう」

ふと歩美は、机に積み重なった本の束の間から、はみ出している紙が気になった。

「……ねえ、これなーに？」

その紙の切れ端をつかんで引つ張ると、バサツと封筒が床に落ちる。その中には、一万円札が何枚も入っていた。封筒からお札が出た状態になっているのに小五郎は慌てふためいた。

「あ、バカ……」

小五郎は慌てて、その封筒に急いでお札をしまいこむと険しい顔つきで子どもたちの方を見る。

「いいか、お前ら……今見たものを蘭に言うんじゃないぞ」

「え、どうして？」

歩美が疑問に思って尋ねるのに、小五郎はなんて答えればいいかわからない様だった。

（ハハーまさか、おっちゃん……）

「へそくりなんですよ？そのお金……」

灰原がずばりと言つてのけ、小五郎は凶星だったようでその言葉にうろたえる。

「へそくり……？栗のなかまか？」

「違いますよ。他の人に知られないようにこっそりお金をためるんです」

手を組みながら、灰原は溜息をつく。

「おおかた何か知られたらまずいものでも買う気だったんでしょ」

歩美と元太と光彦はピンとくると、3人で顔をにやりと笑って見合わせた。

「もつちろん、誰にも言いませんよ」

「俺たち何も見てねーよな」

「そのかわり……！」

蘭が仕度を整えてやってくると、なんだかさつきと違った場の雰囲気。急に違和感を覚える。

「どーしたの？みんな」

首をかしげている蘭に、小五郎はぎこちない笑みを浮かべながら、

「さ、さあ、そろそろ行くか。早くしねえと間に合わねーだろ。そ

うだ蘭、こいつらがどうしてもついてきたいってんで、連れてく  
とになったんだがいいか？」

「え、うん、大丈夫だと思うけど」

さつきまであんなに反対してたのに、と蘭は思ったが深くは考えな  
かった。

(ハハハ…子どもに弱味にぎられて、おどされちゃザマねえって…)  
ちらつと小五郎は子どもたちのほうを見る。

「いいか、絶対に仕事の邪魔はするなよ」

その言葉に、3人は満面の笑みを浮かべながら元気よく手をあげた。

「……はあ〜い!」「」

嬉しそうな3人の方を見ながら「ったく」と溜息をつく。

「オメーら、その前に親に電話しろよ? 帰れるのがいつになるかわ  
かんねーんだから」

そのことをすっかり忘れてたようで、「あ…」と3人は口をそろえ  
て、キャツキャツ言いながら電話をかけはじめた。

6人乗りのレンタカーに7人が乗り込み、小五郎はアクセルを踏ん  
だ。

「お父さん、さつきビール飲んでたけど大丈夫?」

蘭が、運手する小五郎に不安げに問う。

「そついえば、飲酒運転じゃないですか!？」

(道路交通法違反…見つければ減点と罰金だな)

「飲んだのは2口くらいで、酔いはまわってねーから大丈夫だよ!  
氣イ散るから黙ってる」

酒気帯び運転なので、慎重を重ねているが、どこか頼りない。

「なあ、酔ってねーなら、運転してもいいんじゃないか?」

「ダメね。アルコールの成分酵素アセテートが血中に浸透し、血中  
アルコール濃度が最高になるのは摂取後の1時間〜2時間後…。時  
間と比例して酔いがまわってくるから今が一番危ないんじゃない?」



（ま、おっちゃんが事故らないのを祈るしかねーよな）

その前に、検問やってたら終わりだけど。

森で囲まれた山道を走りながら、夕暮れ差す夕時を窓から眺める。  
冷えた風が、車を吹き抜けていった。

1日の最後を照らす紅の夕陽。これから、おとずれるミステリーに  
祝杯をあげているようだった。

そう、ここで引き返していればよかったと思えるミステリーの幕開  
けである。

## 5話 出発（後書き）

こんにちは 蒼羽レイです。

せきごほごほです。

さて、コナン君は暗号わかったみたいですよw

次回がんばって！

では、この辺で。

感想書いてくれるとうれしいな。バイvv

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5849a/>

---

宝石仕掛けの青ダイヤ

2010年10月12日05時44分発行